

# 活動報告書

実施日	令和1年11月22日（金曜）
目的	「坂井苔人」の現状から学び、中山間地域での苔づくりの提言につなげる。
視察先・調査先	坂井苔人 新潟県胎内市坂井
内容及び結果	<p>対応者：苔栽培組合「坂井苔人」代表 齋藤隆胖氏 地域おこし協力隊員 朽網（くたみ）裕子氏 新潟県農林水産部 職員 日本苔技術協会代表 北川義一氏</p> <p>同行者：富樫一成 県議会議員</p> <p>添付資料参照</p> <p>「苔」栽培に関心を持つようになったのは地元上越市内に苔の魅力に取りつかれた農業者がいたためであった。新しいことに挑戦するには、情熱を持った人が必要である。今後伸びる可能性のある「苔」栽培にこの組合がどう取り組んでいるかを調べて、ぜひ参考にして地域を動かしていきたいと思った。</p>
備考	令和1年9月議会の一般質問

始まりは当時英国で暮らしていた朽網（くたみ）裕子氏が、苔の魅力に啓発されたことだった。苔を使った新しい仕事ができないかと、本格的に取り組むなら日本に住むことが有効と考えて家族で移住。その後全国あちこちを巡って苔栽培の適地をさがす中、苔栽培の第一人者と言われていた北川義一氏を新潟に訪ねて、新潟県の胎内市に地域おこし協力隊員として招聘される。

胎内市では複数の地域おこし協力隊員を招聘しているが、坂井生産組合が新しい取り組みとして「苔栽培」に手を挙げた。2018年に十三軒の農家が日本苔技術協会代表の北川義一氏、通称「苔博士」から苔栽培の指導を受けて、「坂井苔人」が始まった。

苔博士によれば、「世界一万種類を超える苔が存在するが栽培の方法はいまだに確立されていない。日本苔技術協会ではそのうちの九種類の栽培方法を確立した。今後「苔」のニーズは日本庭園や全世界の庭園で増え続けていくだろう。苔栽培は二年目にして初めて、移植されても十分に自生し続けられる成長した「苔」として収穫ができる。十分に根の張った「苔」は移植されても長い間生き続けられるので、重宝されるだろうし、また種を取って乾燥させて販売することも可能だ。これは産業として成り立つ。」

現在坂井では朽網さんと共に「坂井苔人」が4アールの有休水田を活用して「ウマスギゴケ」を栽培している。「雪が降ったらそうなるのか」と聞いてみた。実は雪には何の影響も受けずに元気よく成長するそう。確かに私が住む豪雪地帯の上越市山間地域でも「苔」は自生している。ただし、「苔」を販売する方法として、一辺が三十センチくらいの木枠に植えて土付きで販売することを考えている。この木枠が市販のものだと1メートル以上の雪には押しつぶされてしまうらしい。残念だが、上越市の中山間地域では2、3メートルの雪が降るためにこの方法は使えないかも知れない。

今回の訪問に合わせて、北川氏が「苔栽培」に関心を持つ事業家の方々をも招いていたので、事業化に際しての様々の質問があった。栽培された「苔」自体に関してはまだ収穫されていないので実績は出ていないが、種としての乾燥苔はすでに販売されている。種はどうして作るかと言えば、野原にある苔を刈り取って分別し、細断して乾燥させれば出来上がる。乾燥用の機械がまだ開

発されていないので、手作り乾燥機を使って乾燥させるという点が課題だ。

三年目の収穫期に向けて全力投入の「坂井苔人」だが、栽培がベースに乗った時点で「苔玉」づくりやその他の「苔」商品の開発に力を入れるという。

坂井苔人チームの魅力はそのままこの胎内市坂井地域の結束力だと感じる。

